

# イタリア語冠詞論 — 冠詞機能分析方法の提案 —

Studi sull'articolo nella lingua italiana

— Presentazione di un metodo di analisi delle funzioni dell' articolo —

猪 浦 道 夫

Michio IURA

## 0. 序

この小論の目的は、(1)「冠詞とは何か」を定義し、(2)冠詞の機能の分析方法を提案し、(3)それに基づいて、ロマンス諸語、特にイタリア語を中心に、いくつかの言語の冠詞の機能を比較することによって、冠詞を持たない言語を母国語とする我々が、イタリア語を話し、書く時に、どのような点に関心を払うべきかを明らかにすることである。なお、この小論は、かなりの部分補筆したものの、筆者が1985年1月東京外国語大学に提出した修士論文をベースにし、これをサマライズしたものである。

### 1. 冠詞総論 — 冠詞とは何か

まず「冠詞」について様々な考察を試みよう。

(1) 冠詞を持つ言語の分布の問題については既に何回かこの学会誌でもとり上げられているので、深く言及しないことにする。印欧語族以外の言語ではハンガリー語、バスク語、アラビア語の他、ベトナム語、マライ・ポリネシア諸語のいくつかの文法でも「冠詞」という言葉が見られるし、コーカサス諸語の中に冠詞のある言語があるとする説もある。<sup>1)</sup>

が、むしろ問題は、このようなデータをそのまま信用していいかどうかということである。ベトナム語文法では *các* (仏 *les*)、*những* (仏 *des*) を冠詞と説明している。しかし、これらを冠詞として認めるとすれば、ルーマニア語 *niște* デンマーク語 *nogen*、英語の *some* なども冠詞だということになる。一方、タガログ語の冠詞、ペルシャ語の後置詞 *-ra* と不定接尾辞 *-i*、アラビア語の定冠詞 (*qasru malikin* = the castle of a king で *qasru* は冠詞をとらない定形である) やタンウィーンなど、そもそも「冠詞」と呼べるものなのか否か、それ自体が大きな問題であることがわかる。

そこでまず最初に、「何をもって「冠詞」と名付けるか」を決めるために、様々な角度から冠詞の姿を眺めてみよう。

(2) 冠詞の種類に関して、定冠詞、不定冠詞、そしてフランス語、イタリア語の部分冠詞については述べる必要もあるまい。この他ルーマニア語には属格冠詞、形容冠詞があり、ドイツ語、オランダ語の *kein*、*geen* はしばしば否定冠詞と記述される。縮約冠詞(または冠詞前置詞)はロマンス語だけの現象ではなく、ドイツ語等にも存在する。ポルトガル語は不定冠詞との縮約冠詞をも持つ。

筆者の考えでは、これらの様々な冠詞にはそれぞれ存在理由があり、定冠詞と不定冠詞だけを研究対象にするのは、冠詞の本質を解明するには不十分のように思われる。

また類型論の点から言うと、筆者はペルシャ語の不定接尾辞 *-i* を、後に定義するところに従って、冠詞と考えている。とすれば、ペルシャ語は不定冠詞のみを持つ言語だということになる。

(3) 名詞連辞の中での冠詞の位置についても既に何人もの方々が論じておられる。冠詞は名詞の前にも後にもつきうる。また、スウェーデン語やノルウェー語では、冠詞を2度重ねるケースがある(スウ

ェーデン *den stora boken*, ノルウェー *den den stora by(en)*). 順番は異なるが、古典ギリシャ語でも、形容詞を名詞の後へ置くとその形容詞にもう一度冠詞をつける (*to kalon rodon* [the beautiful rose] → *to rodon to kalon* [the rose the beautiful]), フランス語、レトロマン語でも、形容詞が最上級のときには類似の現象が見られる(仏 *l'ami le plus cher*, エンガデイン *l'amih il pü char*). アラビア語のタンウィーンは不定冠詞とは考えられないだろうか。だとすれば、ここでは不定冠詞の重複があることになる (*baitun saghirun* [house-a little-a]). バスク語の定冠詞、ペルシャ語の不定接尾辞も、名詞の後に置かれた形容詞に前接させる(バスク *etxe handia* [house big-the], ペルシャ *shahr-é-bozorgi* [city-of-big-a]). これらを考慮すると、ルーマニア、ブルガリア語などの *ultimele zile* (last-the day) とか、*toplata supa* (hot-the soup) といった表現での「定の情報を早く伝えるため、名詞に前置された形容詞に定冠詞を前接させる」という説明は、一部の言語にしかあてはまらないと言えよう。これとは別に、一部の限定詞が冠詞に先行することがあることも考慮しておこう(伊 *tutto il giorno*, 英 *quite a few students*).

(4) 冠詞の機能について検討してみると、まず名詞の性、数、格のマーカ―としての機能がある。この他に、言語によって程度の差こそあれ、文のあらゆる要素を名詞化する機能をもつ。オランダ語では不定詞句 (*het niet doen van de vereiste aangifte*), ギリシャ語やスペイン語 (*El que no estuviera el alcalde lleó mucho la atención*) では、節をまるごと名詞化することが可能である。また別の品詞(例えば代名詞: カタラン *el meu tabac i el de vostè*, 伊 *ne ho uno*, 西 *mi pluma y la de José*, 古伊 *la vita di Gesù Cristo e la di Maria . . .*, 指示形容詞: 伊 *Per il momento, Pasami il sale, Chiudi la porta*, 所有形容詞: 伊 *Mi lavo le mani*, 英 *He hit her on the head*) の代役機能もある。こうしたものの中でも最も本質的かつ興味深い機能は、「名詞を現実化し」、「特定化する機能」である。

(5) 冠詞の強度ということについては、これまでの研究でまったく考慮されることがなかった。しかし、ルーマニア語の形容冠詞 *prietenul cel mai scump*, 先のフランス語とイタリア語の最上級表現の比較、A・Dauzat が引用している *ça mien ami* というピカルディ方言の言い方などを見ていくと、冠詞の限定能力には言語によって差があることを考えなければならないように思われる。また、イタリア語の場合、名詞の特定化の度合にも差があることを考えざるを得ない(*in cucina* に対して *nella cucina di Paola*).

(6) 冠詞の通時的側面についても充分目を通しておく必要がある。定冠詞が指示代名詞に起源を持つことが多いことはよく知られている。サルディニア語やカタラン語ではラテン語 *ipse* から発展した冠詞が知られている。不定冠詞は数詞「1」に起源を持つことが多く、ペルシャ語の不定接尾辞 *-t* も、古ペルシャ語の *aiva* 「1」に由来している。理論的には矛盾するにも拘らず、いくつかの言語で不定冠詞の複数形が存在する。ルーマニア語の属格与格形 *unor* やスペイン語 *unos, unas* のように類推によってできたものと、フランス語のように部分冠詞の複数形で代用するケースがある。部分冠詞は周知のように、俗ラテン語の段階で属格の標識となっていた前置詞 *de* との一種の縮約冠詞である。プロヴァンス語 (*beure d'aigo*) や 16 世紀の Ramus のフランス語文法などをみると、*de* という形態を冠詞と見ていたこともあるようだ。実際ドイツの文法書の中にはフランス語の *de* を否定冠詞 *kein* と同じものだと言っているものもある。このフランス語の *de* は、発想的にロシア語の否定生格に通ずるものがある。

ドイツ語の *kein*, オランダ語 *geen* は中高ドイツ語の *dehein* (= *irgend einer*) という形に起源をもち、従ってフランス語の *aucun* が否定語になったいきさつを想起させる。ルーマニア語の形容詞はラテン語の *ecce-ille*, 属格冠詞は *ad + ille* から生まれた。前者は、イタリア語の *questo* やスウェーデン語 *den här herre* と同じ構造であり、後者は古フランス語にみられる属格の前置詞 *a* と共通の流れを汲んだものであろう。

冠詞の形態の変遷もひと通り見ておいた方がよい。そのような知識が、しばしばある種の不可解な冠詞の用法について、解決のヒントとなる。例えばイタリア語では、現在の冠詞形態に落ちつくまで、歴史上色々と迂余曲折があった。<sup>2)</sup> 現代イタリア語については、今でも次のような現象が見られる。

- (i) *il dio* は複数で *gli dei* となる,
- (ii) *per lo più, per lo meno* にみられる古形 *lo*,
- (iii) *tutti e due* にみられる古形 *e (= i)*,
- (iv) 日付表現の古形 *li*、及びその誤用 *li* (*là* と混同)、また *li 1* (1日は単数)
- (v) *gli italiani* または *gl' italiani*,
- (vi) *le erbe* または廃たれつつある *l'erbe*,
- (vii) 北イタリア方言にみられる表現 *lo suocero*,
- (viii) 外来語、*pneumatico* 等にみられる揺れ、
- (ix) 形容詞に先立たれる複数名詞に用いることがある *di: di grand brutte notizie*,
- (x) 無冠詞言語における名詞の限定機能はどのように表現されているのか、その類型について調べてみよう。

(i) 名詞の特別な変化：フィンランド語では、対格と分格を使いわけて「総体」と「部分」を表現しわけ。<sup>3)</sup> トルコ語は「定」の接辞 *-i* をもつ。ペルシャ語の不定接辞 *-i* も、冠詞と見ないならばこのカテゴリーに属する。

(ii) 形容詞の変化：クロアチア語、スロベニア語では、歴史的にはロシア語の形容詞短語尾と起源を同じくする限定格変化が保存されている。

(iii) 動詞の変化：ハンガリー語の動詞は限定活用と非限定活用をもち、目的語が「定」か「不定」かを予告する。ロシア語の短語尾形容詞が時間的な限定を表わすものとすれば、スペイン語では *ser, estar* が同じ機能上の対立を表わしていると言えないだろうか。

(iv) 語順：中国語、チェコ語など多くの言語で、明らかに言語心理的な理由によるものと考えられるが、不定の名詞を(特に紹介文、提示文では)文頭に立てるのを嫌う傾向があり、これは、イタリア語の統辞についてもあてはまる)、従って、これが「定」、「不定」の対立に関与している。

(v) 声調やアクセントの変化：ウズベク語、オセート語、フィンランド語などにその例を見出す。

(vi) 後置詞：日本語、朝鮮語である種の「定」、「不定」の対立に関与していることはよく知られている。ペルシャ語の唯一の後置詞 *ra* も、少なくとも部分的には「定」を表わす。

(vii) その他：タガログ語の冠詞は単なる前置詞のようにみえるが、ことによると日本語における助詞「は」、「が」のような機能をもっているかもしれない。またスワヒリ語は観念的指示性をもつ第2の指示形容詞(=冠詞?)をもつ。

(8) 冠詞とは何かという命題について、以上述べた点を踏まえて、筆者は次のように考えた。

- (i) 統辞上の条件として、接辞と区別されること。すなわち、冠詞と名詞の間に他の要素が入りうること。
- (ii) それ自体は積極的な意味を持たないが、名詞の実体にある種の限定を加える機能があること。つまり、一般に「冠詞」対「無冠詞」は「実質的」対「抽象的」、「定冠詞」対「不定冠詞」は「定」対「不定」の対立に關与する。
- (9) 「定」definiteness の定義は、次のように下したい。これは以下の冠詞機能分析の展開にあたって、非常に重要なものである。

「話者の言及する名詞に関して、聞き手が、話者のもつその名詞についてのイメージと同一のイメージをもつであろうと、話者が判断した時、その名詞は、その発話の時点で、「定」のものとして表現される」

## 2 冠詞機能の分析方法

筆者は次のような手順で分析を行った。

- (1) 「定」の様々な具体的類型
- (2) 「不定」状態のいくつかの具体的なケース
- (3) 原則をくずすいくつかのファクター
- (4) まとめと分析表の作成 — 結論

これらを順に検討していこう。

### (1) 「定」の様々な具体的類型

(i) 総称 — ある名詞の一般概念を表わすケースで、従って原則的に「定」であるはずである。ロマンス諸語では一般に原則通り定冠詞を用いるが、「抽象的な一概念」として把えるか、「個体の全集合」としてみるかで、名詞を単数にも複数にもしうる。従って、ニュアンスは異なり、常に同じ意味になる訳ではない。不定冠詞も総称を表わす場合があるが、Lorenzo Renzi (1976)<sup>4)</sup> はこれを文法的代喩として説明する。筆者は「サンプリングによる総称指示」と呼びたい。ゲルマン諸語（特に英語）に見られる複数無冠詞による総称表現は従って、極めて実際のな、ロマンス諸語とは発想を異にしたものと言える。配分詞機能は一般にこの総称的機能から発展したもののだが、英語だけは古く前置詞 on が不定冠詞と混同されたため、現代英語の体系内だけで見ると、不定冠詞 a が配分詞機能をもつ珍しいシステムになっている。因みに、英語は定冠詞複数による総称表現はありえず、また不可算名詞の場合、単数無冠詞が総称を表わす。これは「抽象」対「現実」の対立の関点からは、理に叶っている。イタリア語、フランス語でも古くは抽象名詞に定冠詞を用いなかった。

(ii) 先行記述型 — 先に言及された名詞を「定」のものとして表現するのは容易に理解される。筆者は、当該の名詞が話者によって一度言及された場合をこの型に考えている。すなわち、周囲の事情とか常識、習慣などの助けによって、また前述された関連の語によって特定される場合（Hawkins のいう“trigger”による特定化）は、後述の「心理的限定」型に含めるのが適当だと思う。

(iii) 後方記述型 — 予め「定」となることを予告しておいて、すぐその名詞のイメージを相手に了解させる（具体的には属格や関係節などによって）場合を言う。この場合、いつも見落されがちなのは、この特定化が「聞き手に話し手がイメージするものを同定させるに十分な場合にのみ」有効であるとい

う点である。逆に言えば、限定句（節）が話者が考えている特定化に不十分なものと話者に意識されるならば、その限定を受ける名詞は「定」にはならないということである。同格節、不定法句、最上級、序列、自己限定性をもつ一部の不定形容詞、名詞を限定する副詞類、分詞句などが、上述したものの他に、具体的な限定要素として考えられる。

(iv) 直載型 — 前2つの型を各々前方照応型、後方照応型と呼ぶならば、さしずめこれは同時照応型である。その性格上、書き言葉の中には表われにくい。具体的に物を指示しながら限定し特定化するのであるから、最も原始的な「定」の伝達方法であるとも言える。ただし紹介型の文では、あるカテゴリーに属する一個体であることを示すので、「不定」の形で表現される。

なお、アラビア語、ルーマニア語、ウェールズ語では指示形容詞と定冠詞が共起する。

(v) 譲渡不可能属性 — 所有主がすでに明示されている名詞は自動的に定冠詞をとるが、

(A) *Si fratturerò una gamba sciando.*

(B) *Angela ha degli occhi molto belli.*

のようなケースがあることを考慮しておかなければならない。(A)では意味上限定性が充分ではない。(B)では、身体の一部を特殊な観点から見たため、*occhi* という語がいわば普通名詞化しているのである。

(vi) 譲渡可能属性 — 英語の特殊性がここに見られる。英語ではこのテリトリーに代名詞所有格が大きく足を踏み入れている。イタリア語、ポルトガル語などにみられる、所有形容詞の付加による自動的特定化（定冠詞使用）はこの型のもと考えられる。<sup>5)</sup> フランス語、英語の所有詞はその中に定冠詞を含むと考えられる。*mon plus cher ami* は最上級である。イタリア語で一部の親族名称で冠詞が落ちるのは、一種の固有名詞化によって、イエスペルセンの言う「親しみやすさ」が最高ランクに達したためである。*a casa mia, con sua grande sorpresa* 型の表現で冠詞が消えるのは、これらの表現の成句性が比較的強いことと、前置詞の存在が冠詞の存在を嫌うことが、その要因になっているものと考えられよう。

(vii) 唯一物 — 唯一物は「唯一なる存在の故に」それ自体自己限定的であるので、通常は「定」のものとして表わされる。だがその性質上「親しみやすさ」は最高ランクに達するため、特に固有名詞では定冠詞がつかないことが多い。ロマンス諸語は比較的定冠詞を多用し、人名と都市名を除いてはおおむね定冠詞を用いる。現代ギリシャ語、ついでイタリア語は極めて積極的に定冠詞を使用し、人名にもそれが及んでいることはよく知られている。唯一物が不定冠詞をとる場合には、何らかの理由によってそれが普通名詞化している：

*una Napoli d'altri tempi. un sole che scotta.*

逆に *la Roma dei Cesari* では限定句が *Roma* を特定化する作用を与えている。

(viii) 心理的限定 — 先に述べたように、状況、習慣、関連物の言及 (trigger) などによって、聞き手が話者のイメージする名詞を同定できると考えられる場合がこれにあたる。このテリトリーにおけるイタリア語定冠詞の積極性は類を見ない。英語はこの点最も消極的で、フランス語はその中間に位置する。Renzi の1975年の論文<sup>6)</sup>は、イタリア語の定冠詞の多用を裏付けるものである。一つだけ例を挙げる

- *Sorvegliala bene ! Sta attenta che non bruci !*

- *Bene.*

- *Intanto lava e prepara l'insalata.*

(2) 「不定」状態のいくつかの具体的なケース

大きく分けて、(1)名詞が抽象的概念の状態にとどまっているケース(∅冠詞)、(2)現実的な概念の状態ではあるが、聞き手が話者のイメージするものを同定できないケース(不定、部分冠詞)にわかれる。

(i) 抽象的な段階にとどまっている状態

ロマンス諸語においては、単数無冠詞名詞は原則として、(固有名詞は別として)その名詞が話者の頭の中で、現実的なイメージとして扱えられていないことを示す。従って多くの場合、成句的な表現の中に融合してそれ自体は独立した表象力を失っている場合が多い。andare a scuola は「登校する」という一つ概念であり、我々はこの表現を口にするとき、「一つの現実的かつ具体的な学校」というものを思い浮かべることなく通り過ぎてしまう。換言すれば、教材のセールスマンが学校に行くときにはこの表現は不適当なものとなる。これに対して、andare alla scuola, andare a una scuola と言えば「学校へ行く」という。各々の要素が組み合わさった文の一部となり、物理的に学校に行きさえすればその主語は誰でもよいことになる。

繫辞構文で属詞が無冠詞となるのは、属詞名詞が肩書的で生身の人間を指すものではなく、形容詞に近づいているためと考えられる。同格や作因 causative 構文にもこの考え方が延長される。こうして考えてみると、英語ではこのような領域に不定冠詞が広く用いられていることがわかる。またフランス語の de も独特の冠詞であることが理解される。

(ii) 現実化してはいるが「定」の状態ではないケース

(a) 一般的な意味の未知の個体

この場合には、話者自身が任意不特定の個体を意識している。不定冠詞が総体を表わしうるのは「任意→全体」の考え方から発展したものであり、英語やドイツ語が複数無冠詞をもって総称を表わすのも、「任意不特定→全体」の考え方から出ている。この考え方は絶対的にロマンス諸語になじまないという訳ではなく、イタリア語では例えば dei bravi bambini non piangono<sup>4)</sup> という文章は正しい。

「総体」から「未知の個体」へと心理的に微妙に変化していく様子がうかがえる好例がある。

- Lavati bene !

- Sì, faccio la doccia.

- Non fare la doccia calda. Fa' una doccia fredda e ti sentirai meglio.

最初の2つの定冠詞は doccia をごく常識的な普通のものとして、つまり一般概念的に意識しているが、最後の不定冠詞は相手が予期しない性格の doccia の姿を引き出す役目を果している。

(b) 特定の意味の未知の個体

話者は特定の個体を想定しているものの、聞き手がまだそれを同定できない場合をいう。

Sto cercando un ragazzo. Lui è il mio allievo.

イタリア語の場合大きな問題がある。この意味での un cane の複数形が dei cani か ∅ cani かという問題である。Renzi (1982)<sup>7)</sup> はこの問題を論じている。結論から言うと、筆者は大きなためらいを感じつつ、dei cani を正当な複数形とするレンツィの考え方を支持する。理由は、この dei があってはならない場合と、必ず必要な場合とを比較していくと、後者の方がやや分がいいからである。この問題については、後述の変化要因の(XV)限定要素の存在とその性格、のところで例を挙げる。

もう一つの問題は、物質名詞の現実的・不定概念が *del* と  $\phi$  のどちらで表わされるかという問題である。

L'aereo ritorna sulla sua rotta ! Bene !

Ha ( ) carburante sufficiente per arrivare al più vicino aeroporto. (Topolino)

の文で ( ) 内には *il*,  $\phi$ , *del* のどれも入りうる。原文は  $\phi$  になっているが、*del* をつければ「いくらかの」という分量のイメージがより積極的に示される。また定冠詞を用いるのはやや抵抗はあるが、この場合 *sufficiente* 以下の限定句の拘束性が強く感じられ、「～するに充分で、かつそれだけの」という意味あいを加える。

もう一つ例を挙げる。

- C'è come un lago ! L'acqua scorre una specie di caverna ! Ci sono <sup>(1)</sup> $\phi$  pepite di elettro dappertutto !

- Fantastico !

- Ah ! Se potessimo allargare questo foro ! Così è troppo piccolo ! Non riesco a passare !

- Ci vorrebbe <sup>(2)</sup>*dell'*esplosivo !

- <sup>(3)</sup> $\phi$  Esplosivo ? Possiamo farlo !

- Che ?

- Le pareti della caverna sono coperte di salnitro . . .

- E prima abbiamo visto <sup>(4)</sup>*dello* zolfo puro nelle spaccature della roccia.

- Da quei tronchi secchi possiamo ricavare <sup>(5)</sup> $\phi$  carbone vegetale

- E <sup>(6)</sup> $\phi$  salnitro, più <sup>(7)</sup> $\phi$  zolfo, più <sup>(8)</sup> $\phi$  carbone . . .

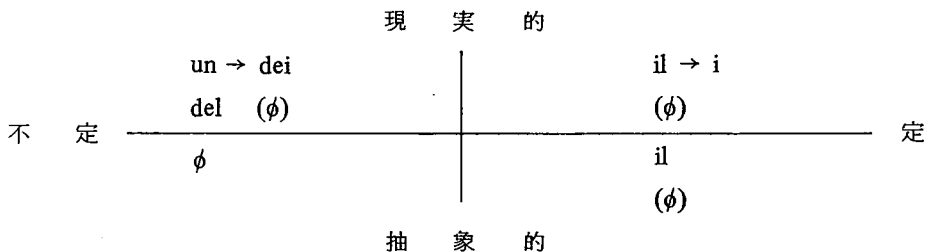
- Ma certo ! Si ottiene <sup>(9)</sup> $\phi$  polvere da sparo ! (Topolino)

(1)は物質の「存在」に重点が置かれ、「分量」の気持が強い部分冠詞はついていない。(2)は逆に「分量」に重点がある。(3)は呼格的、(4)の場合部分冠詞がなくてもよいが、冠詞があることである一定量の存在がより強く印象づけられている。(5)では再び物質が話者の抽象的なイメージとして扱われている。(6)(7)(8)は、後述する「列挙」の要因によって  $\phi$  になっている。そして(9)と類似して、暗にその物質が「できるかどうか(つまり現実のものとなるかどうか)」わからないという状態を示している。

このように考えてみると、部分冠詞を用いた場合と  $\phi$  冠詞を用いた場合の相違は、「現実的な量感」をより積極的な含みをもって前面に押し出してくるかどうかという違いだと考えられる。しかし部分冠詞の使用には地方差、個人差もあり、そして何よりも後述する様々な変化要因によって、容易に省かれたりもするので、この対立はフランス語の場合に比べると非常にルーズなものといえる。

### (3) 原則をくずすいくつかの要因

これまで述べてきた冠詞の機能をまとめると、次のように図示できる。<sup>8)</sup>



抽象的で不定のものといわば名詞としての表象力がゼロに近い、いわば活生化できない状態と言える。それは単なる辞書の見出しや店の看板、成句の中に凝結してしまっただ状態である。すべての名詞の抽象的な状態での一般概念は、それはそれで共通の認識に立って「定」のものとして扱われるので、定冠詞が用いられる。古くはイタリア語でもフランス語でも抽象性が優先されて $\phi$ で表現された。英語はまだこの古い状態を保存している。不定の名詞が現実化されると、普通名詞はun、物質名詞はdelを伴う。普通名詞は複数になると、手の届く範囲での不特定多数はdeiを用い、実際には把握されにくい状態の不特定多数には $\phi$ を用いる。この場合、見方によっては、把握されにくいということで抽象的状态の名詞が「特定化」によって「定」となると単数または複数の定冠詞がつく。この場合しかし、いわゆる「親しみやすさ」が一定の度を越すと再び $\phi$ になる。

このような原則は様々な要因によって変更を受ける。それらを順に見ていこう。

#### (i) 名詞の数

名詞の数の違いによって冠詞の有無の可能性が影響される。

- × Ho comprato matita dal cartolaio
- Ho comprato matite dal cartolaio
- andare in macchina
- × andare in macchine

上記の例は、普通名詞の単数形が原則として冠詞なくしては現実化しないのに対し、複数形は $\phi$ 冠詞形でも現実化しうること起因するものである。

#### (ii) 名詞のカテゴリー

名詞のカテゴリー分けはいろいろな案が出されているが、一般によく知られているのは、普通名詞、物質名詞、抽象名詞、集合名詞、固有名詞、唯一物名詞などである。各々の名詞のその性質によって独特の姿をもつてであろうことは容易に想像がつく。特に英語の冠詞はこの要因が重要であり、通常可算名詞には不定冠詞を用いることはない。これに対して一般にロマンス諸語では、抽象名詞や固有名詞でも特殊な限定句などの付加によって、理論上は普通名詞化しうるので、この要因はさほど決定的なものではない。

#### (iii) 統辞条件

名詞はそれが主語、目的語、前置詞の目的語など、文中でどのような位置を占めるかによって、冠詞との結びつきに変化がみられる。ルーマニア語では一部の前置詞を除いて、前置詞の後の冠詞が省略される。イタリア語でも後述するようにこうした傾向があり、フランス語では、enという前置詞が一部の熟語表現を除いて、歴史的な理由で冠詞を排除することが知られている。全体としては、主語、目的語、前置詞の目的語、の順で冠詞を要求する度合いが強い。

#### (iv) 呼 格

呼格は直載的機能の「定」の「親しみやすさ」が大きいため、 $\phi$ になったものと考えられる。

#### (v) 否定文

否定文において存在が否定された語に冠詞がつかないことがある。これに関して、ポールロワイヤルの次の記述がそのままイタリア語にもあてはまる。《否定の節においては、否定が置かれた語は、その否定自体によって、その語の一般的意味に解せられるように規定される。否定は全てを取り除くことが



その特性だからである。》

(iv) 繫辞構文

繫辞構文の属詞名詞が無冠詞を原則とするのは先に述べた原則による。

(vii) 作因構文

イタリア語の *come presidente, da ragazzo* などの表現もこれにあたる。ポールロワイヤル、Väänänen (1951)<sup>9)</sup> もこれに言及している。

(viii) 同 格

同格も上記 2 つの構文と同様の考え方ができる。ところで繫辞構文、同格には冠詞のついた場合も見受けられる。この場合、その冠詞のついた名詞は主語に対して形容詞に近い役割を離れて、一つの名詞としての主体性を取り戻したと考えればよい。

Cicerone, *il famoso oratore dell'antichità.*

Giorgio, *un amico fedele e discreto.*

(ix) 列 挙

列挙が文体上の理由によって冠詞を排除しがちであることはよく知られている。現代ギリシャ語のように、こうした場合にも冠詞を繰返す言語もあるので、絶対的な要因ではない。

(x) 対句、並列

対句、並列の表現などにも、列挙の場合と同様の文体上の理由から、冠詞が排除されることが観察される。

(xi) 好 音 性

筆者は次のような例において、前置詞の影響とともに、好音性の要因が働いているのではないかと思っている。

- E tu, dove lavori? - In  $\phi$  biblioteca.

- Nella biblioteca della CEE?

つまり、この場合 in の後に女性定冠詞がくると音声的に重くなるので、次の文のように強い限定句がないと冠詞が落とされるのである。逆男性名詞の場合にはこれは起こらない。

- Entra nel salotto

- Ma no, restiamo qui in  $\phi$  cucina.

(xii) 対立を中和させる他の限定辞の存在

定数量詞は不定冠詞、部分冠詞を排除する(不定冠詞が概数を表わすときは別)。ただし、数詞の場合は、定冠詞と競合できる。poco, alcuno, tanto などの不定数量詞類は冠詞をとらない。ただし、tutto は全体に言及するなら定冠詞をとるのが普通であるが、対象が不特定のものであれば不定冠詞もとらうる(tutto un paese)。

特定化辞のうち、ogni, ciascuno は配分詞的なので冠詞をとらない。qualunque, qualsiasi は、その意味上不定冠詞とは共存できる。また altro は条件がそろいさえすれば、どのような冠詞とも共存できる(しかしスペイン語 otro は単数不定冠詞 un を排除する)。

quale, che といった個別化辞は冠詞とともに用いられない。序数は一般に唯一物化を起こすので定冠詞を要求する。関係代名詞 il quale は文法的道具として、先行詞明示のため il が付いている。

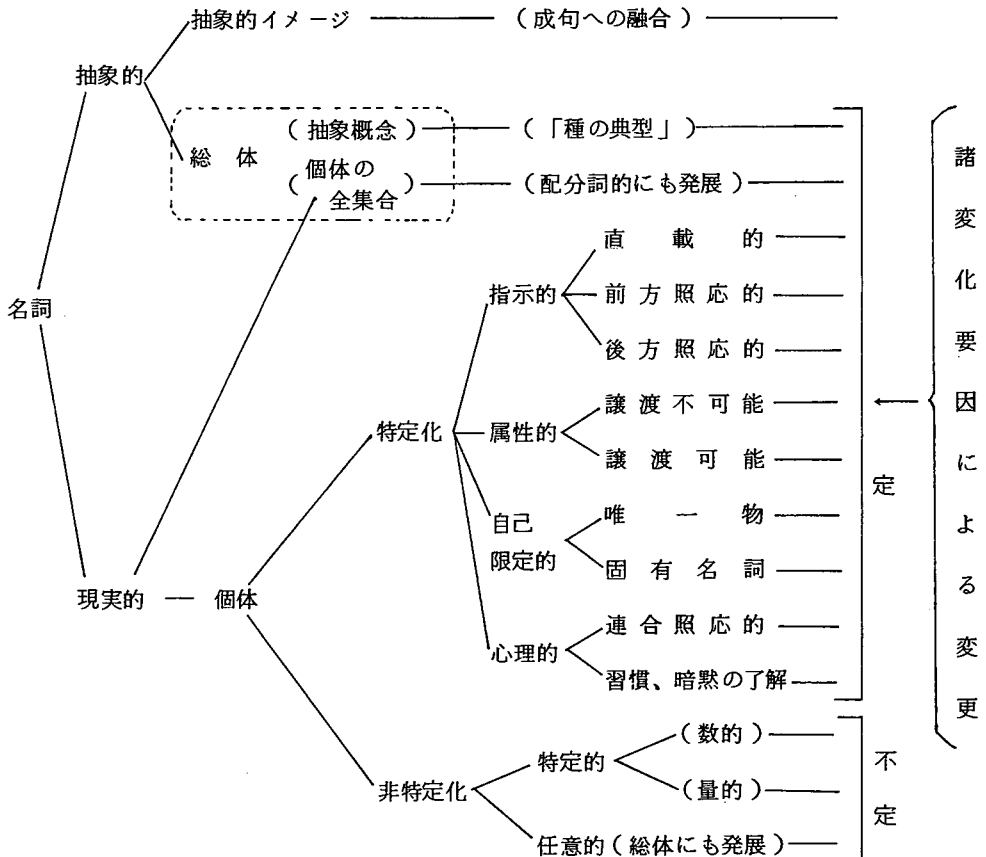


(D) Cerco *degli* studenti che possano parlare il russo.

これら2つの文はよく似ているが、(C)の文は *degli* を外しては言えないが、(D)では  $\phi$  でも正しい。これは関係節の中の接続法が影響している。つまり関係節に接続法が出てくるということは、先行詞の実体が確認されないからであり、このことが逆に  $\phi$  冠詞による表現を許しているのである。存在が疑われる先行詞につく関係節で接続法が出てくる例はフランス語にも見られる。アラビア語の関係代名詞は、先行詞が不定の名詞の時には消失することも思い出される。こうしたことから、イタリア語における不定名詞の複数形は、*dei cani* の形がふさわしいのではないかと考えられる。そして、存在感が薄いときに  $\phi$  *cani* の形をとる傾向が強いと言うのが適当ではないかと、筆者は考える。

4. 冠詞の機能のまとめの分析表 — 結論

これまでの考察に基づいて、筆者は次のような分析表を作成した。



これらをまとめると、結局冠詞のメカニズムを解明する基本となるのは、「現実的と抽象的」、「定と不安」の2本の大きな柱であり、それに様々な要因が加わって名詞の姿に影響を与えていることがわかる。

またこの分析に基づいて比較をするならば、他の言語との冠詞機能の違いもよくわかる。例えばフランス語はイタリア語に基本的には類似した傾向があるものの、Guiraud<sup>10)</sup>の言う中世以来のフランス語における抽象名詞への冠詞の発達によって、抽象名詞により多く冠詞を用いる。部分冠詞は従ってイタリア語より使われる頻度が高い。一方イタリア語は、固有名詞、心理的限定による定冠詞の使用に対する積極性が大きく、諸変化要因による変更も受けやすい。

仏伊両語に比べると、スペイン語は部分冠詞の欠除(従ってドイツ語と同じように、物質名詞の分量を表わすのに無冠詞となる)、不定冠詞複数の用法が特徴的である。

英語はヨーロッパの中では異質の体系を持っている。総称は通常任意不特定複数の形がスタンダードとされ、固有名詞、連合照応的特定化には特に消極的である。属性的(特に譲渡可能的の場合は)特定化には代名詞所有格が大抵使われる。また不定形容詞 *some* がしばしば不定冠詞の複数のごとくに用いられ、配分詞機能は不定冠詞でも表わされる。また物質名詞、抽象名詞の一般概念は無冠詞で表わされ、成句においても不定冠詞の多用が目立つ。

ルーマニア語については、他の言語の冠詞と同例には置けないように筆者には思われるので、今回は比較の対象外に置いた。

筆者は上記の分析システムによってかなり明確に、各言語の冠詞の機能、そしてその限定度の分布が把握されると考えており、ゲルマン諸語との比較にも関心をもっている。また同時に、ロマンス諸語間でもより一層深い次元での比較を試みたいと考えている。

#### 註

- 1) TRUBECKOJ, Nikolaj (1939): "Le rapport entre le déterminé le déterminant et le défini", Genève, 1939.
- 2) Migliorini "Storia della Lingua Italiana" や、坂本鉄男(1963): 13世紀までのイタリア語男性定冠詞の形態について、東外大論集10、Rohlf'sのGrammatica Storica など参照。
- 3) 俗ラテン語 *edere panem/edere panis* が思い出される。
- 4) RENZI, Lorenzo (1976): "Grammatica e storia dell' articolo italiano" (Studi di Grammatica Italiana, Vol. V), 1976. これは重要な論文であり、本論文も多くの示唆を受けた。
- 5) スペイン語、アイスランド語では、所有形容詞が名詞の後にあると定冠詞が出る。
- 6) RENZI, L (1975): "Come leggere l'articolo IL" (Lingua Nostra Vol. 36), 1975
- 7) RENZI, L (1982): "Il vero plurale dell'articolo UNO" (Lingua Nostra" 1982)
- 8) 既に CHRISTOPHERSEN, Paul (1939): The Article, A Study of Their Theory and Use in English, Munksgaard, Copenhagen, 1939, に同様の記述が見られる。
- 9) VÄÄNÄNEN, Veikko (1951): "Il est venu comme ambassadeur", "Il agit en soldat" et locutions analogues en latin, français, italien, et espagnol, Helsinki, 1951
- 10) GUIRAUD, Pierre (1963): L'Ancien Français, PUF, Paris, 1963

## 参 考 文 献

- 註に挙げたものの他、著者が多くの示唆を与えられたものとして、
- 一色マサ子(1954)：英文法シリーズ9巻『冠詞』、研究社、東京
- Tinoco, Antonio Ruiz：日本語の「限定」、統語論と意味論の接触、東京外国語大学 1982 年度卒論
- 松原秀治(1978)：『フランス語の冠詞』、白水社、東京
- 大賀正喜：仏作文覚え書 — その1、冠詞の研究 —、青山学院大紀要
- 大賀正喜：仏作文覚え書 — その2、ふたたび冠詞について —、青山学院大紀要
- 小方厚彦(1972)：『16世紀フランスにおけるフランス語とフランス語観 — Ramus の研究 —』、関西大学出版、大阪
- 関口存男(1960)：『冠詞—定冠詞篇』、三修社、東京
- 関口存男(1961)：『冠詞—不定冠詞篇』、三修社、東京
- 関口存男(1962)：『冠詞—無冠詞篇』、三修社、東京
- 鷲尾 猛(1960)：『フランス語冠詞の話』、大学書林、東京
- 鷲尾 猛：冠詞の話(続)、遺稿(未発表)
- \* BALLEY, Charles (1965): *Linguistique Générale et Linguistique Française*, 4 éd. A. Francke, Bernes, 1965
- \* BIARD, A. (1908): *L'article Défini dans les Principales Langues Européennes*, Bordeaux, 1908
- \* CLOSE, R.A. (1976): *English as a Foreign Language*, George Allen & Unwin, London, 1976
- ERASMI, Gabriele (1978?): "L'articolo e il possessivo in italiano" *Rassegna Italiana di Linguistica Applicata*, 1978?
- GUILLAUME, Gustav (1919): *Le Problème de l'Article et sa Solution dans la Langue Française*, Hachette, Paris, 1919
- HALLIDAY, M. & HASAN, R. (1976): *Cohesion in English*, Longman, London, 1976
- JESPERSEN, Otto (1924): *The Philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin, London, 1924
- LEPSCHY, A. L. & LEPSCHY, G (1981): *La Lingua Italiana*, Bompiani, Milano, 1981
- MEYER-LÜBKE, W. (1894): *Grammatik der Romanischen Sprachen II*. Leipzig, 1894
- NEBOT, Francesco Abad (1977): *El articulo Sistema y usos*, Ed. Aravaca, Madrid, 1977
- \* POSNER, Rebecca (1966): *The Romance Language - A Linguistic Introduction*, Garden City N.Y. Double Day, 1966
- RENZI, Lorenzo (1979): "Per la storia dell'articolo romanzo" (XIV Congresso Internazionale di Linguistica e Filologia Romanza, Atti 1979) Gaetano Macchiaroli, Napoli, 1979
- RENZI, Lorenzo & VANELLI, Laura (1975): "E un ingegnere/E ingegnere (e anche Fa l'ingegnere)" (*Lingua Nostra* Vol. 36) 1975
- TAHASE, Eugène (1965): "La postposition de l'article défini en roumain" (*Actes du Xe Congrès International de Linguistique et Philologie Romane*, Strasbourg, 1962), Klincksieck, Paris, 1965

TECAVČIĆ, Pavao (1980): Grammatica Storica dell'Italiano, II Morfosintassi, Il Mulino, Bologna, 1980

WILMET, Marc (1979): "Considération sur "DE" article" (XVI Congresso Internazionale di Linguistica e Filologia Romanza, Atti, 1979) Gaetano Macchiaroli, Napoli, 1979

( \* 印 邦訳あり )